

人生ハンド仏句

第14号

H. 15. 5. 1
(毎月1日発行)

編集・発行
玉蓮山
真成寺
編集部

お母さんのお守り

住職 谷川 寛俊

世の中には、多くの（お守り）があります。交通安全のお守り、受験合格のお守り、商売繁盛のお守り、私達のさまざまな願いに応じて、お守りの種類は、数えきれないほど目につきます。

でも今からお話するお守りは、滅多に手にする事の出来ない、霊験あらたかなお守りです。そのお守りというのは、何の変哲もない《一粒の豆》だったのです。

ある所に、交通事故でお父さんを失った母子がいました。上の子は小学三年生、下の子は小学一年生。事故は、お父さんが加害者という裁決を受け、家も土地も売り払わなければならなくなり、一家は文字通り路頭に迷う身となったのです。

お母さんは、生活を支えるために六時に家を出、ビルの清掃、それから学校給食の手伝い、夜は料理屋で皿洗いと身を粉にして働きました。でも、そんな生活が半年、八ヶ月、十ヶ月と続く内に、身も心もクタクタになってしまいました。いつしかお母さんの頭には、いつも死ぬ事ばかりが思い浮かんできたのです。

そんなある日、お母さんは朝、出がけに子供達に置手紙をかきました。「お兄ちゃん、おなべに豆が浸してあります。これを、今晚のおかずにしなさいね。豆がやわらかくなったら、おしようにゆを少し入れなさい。」その日も一日、くたびれ切って帰って来たお母さんは、今日こそ死んでしまおうと睡眠薬を買っていました。そんな事はまったく知らない二人の子供達は、スヤスヤと眠っています。その時、彼女は『お母さんへ』と書いた、一通の手紙を目にしまし

た。「お母さん、ごめんなさい。僕一生けんめい豆をにました。でも失敗しました。だからごはんに、水をかけて食べました。お母さん、明日の朝、もう一度僕に豆のかたを教えてください。そして僕のいた豆を一つぶだけ食べてみてください。僕先にねます。お母さん、おやすみなさい」

このお兄ちゃんの手紙を読んだお母さんの目に、どっと涙があふれました。「ああ、お兄ちゃんは、あんなにも小さいのに、こんなに一生懸命に生きてくれているんだ」お母さんは、そう言って、お兄ちゃんの煮たしよっぱい豆を、涙と一緒に一つ一つ押し頂いて食べたのです。

それ以来《一粒の豆》がお母さんの大切なお守りになりました。

あの時の事を思えば、どんなことだって我慢ができるといふ、お母さんだけの秘密のお守りなのです。

その時の出会いが
人生を根底から
かえることがある
よき出会いを